

千葉大学医学部同窓会報 第65号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171 内線2012



昭和五十三年一月十四日

千葉大学医学部附属病院

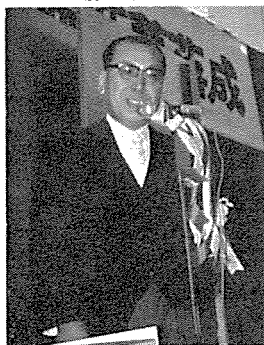
新築落成記念式典・祝賀会

盛大に挙行される

横川宗雄医学部長



佐藤 博病院長



香月秀雄学長



祝賀会場風景

祝 千葉大学医学部附属病院新築落成



堀越達郎式典委員長

青く透ける冬晴れの日

式典・祝賀会はなやかに

地上十二階、地下二階の巨大な白亜の新病院の新築落成記念式典、祝賀会の日には抜けるような冬晴れとなりその首途にふさわしい日となった。昭和四十八年三月の起工から数えても五年、構想の発端からみれば十年余の才月が流れた。着工後に起こった国内国外の経済状況の変動の余波を乗り越えなければならなかった一事を思い起こしても、関係各位、大小さまざまな努力の甲斐を思わなければならぬ。建物面積五八、七七七平米、八三五床の大病院はこの後三月一日より業務を開始した。記念行事は午前中からはじまり文部省、県関係者を含め、学内外より実に多数の参加者があり、式典のみならず祝賀会のはなやかさはやはり喜びの象徴であった。

千葉大学医学部附属病院新築落成記念式

学長式辞

本学の医学部附属病院は、昭和十二年、千葉医科大学附属病院として設立され、学生の教育、医師の研究、研修の場として、更に地域医療の中心的存在として、多くの医学界の先達を生み、その実績は高く評価されてきました。しかし、ここ三十年の医学の急速な進歩は、専門分野の細分化と、これに伴う集中管理の組織化を、必然的に要求されるに至りました。残念乍ら、東洋一と称せられたこの病院も、それ等の要望に応えるには、機能的に適性を欠いていたと言えます。増築計画、更に新営計画が真剣に取り上げられてから二十年の歳月が流れました。この二十年という期間、医学教育の場を辛うじて支え、医療の中核体としての自覚を見失うことなく、営々と努力されて来た多くの先輩諸公、そして、教官、職員、学生

諸君に対し、その御苦労に感謝すると共に深い敬意を表します。医学は、病める人を診断し、治療する役割を担っていることは、現在も変わって来ておりません。しかし、病める人の前提として、人そのものを知ることが医療の原点であり、人と科学との結合を求める医学は、人の生活、文化を支える基本的な学問分野とも言えます。そして、生命の起源を探し求める医学の基礎的研究は、分子生物学、生命科学といった表現で示されていく様に、既に物理・化学の分野に接触し、医学の裾野は物象次元の領域に強く指向されて来ております。しかし、人を「もの」として理解する作業のほかに、人が人であることの原点としての精神活動を解決しなければならぬ宿命を、医学は担っており、医学を、人を知る最も基本的な学

問として捉えない限り、われわれは甚だ狭い研究分野を策定し、これに没頭し、本道に還る道筋を見失う恐れがあります。医学を特殊な分野であるとする言い逃れは、永く続くとは思われません。

この新病院の中で、臨床医学に専念される多くの人達は、生きた人、病める人から多くのことを学び、人の生活の基本となる哲学を生み、文化を創造する精神活動の情報、他の研究分野の人達に提供する義務を持つていると思います。医学に要望されている現実の処理でさえ、甚だ困難な道であると考えますが、医学は、これに加えて、総合大学の全分野に亘る人間学の問題提供者であり、情報源であるべきと考えます。そして医学者自身が最も真摯なその研究の先導者であるべきと思います。

ここに膨大な費用を投じ、永い期間夜を徹して教官、職員の意見を汲み上げ、これを完成された多くの方達の、他に類を見ない誠意と努力に対しては、感謝の言葉さえありません。この新病院に、生命を与え、機能あるものにするのは、ここに勤務、勉学する諸君の心にあると思います。人を追いつく心を探し求める人達が、ここにどの様な世界をつくるかを、私は大きな期待をもって見守りたいと思います。

昭和五十三年一月十四日

千葉大学学長 香月秀雄

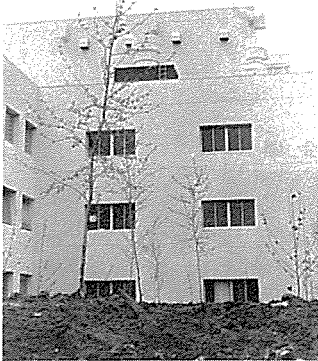
白樺苗木・長野県より

新病院に寄贈される

このほど大学病院の新築落成を、一林が見られることであろう。立派な記念として、長野県より白樺の苗木に育てよう努力が大切である。約30本の寄贈があった。これは長野県立須坂病院院長森川二男先生・同副院長熊谷信夫先生、本学生理学本間三郎教授等のご努力で実現したものであり、去る3月28日到着し新病院母子センター東側の空地に植樹された。あと数年もすれば附属病院のわきに白樺の



千葉大学医学部百周年記念植樹
新病院表玄関前広場にある。
香月学長書による碑は記念樹(くすの木)の根本に建つ。



●千葉大学医学部百周年記念誌について
去る昭和五十年に医学部百周年を迎えたのを機に、萩原弥四郎教授を委員長として編集を急いでいた記念誌は、昭和五十三年一月十日に完成し、折しも行なわれた新病院新築落成記念式典に間に合うように刊行された。昭和三十五年刊行された医学部八十五年史と共に貴重な資料となる。

●新病院を中心に緑化を
新病院周辺、その前庭にあたる凡秋谷、凡秋小径は、その風趣を保ちつつ改善し、多数の植樹を行なう企画があるので、各クラス毎にでも記念樹をご寄贈願いたい。

●同窓会御遺族よりの寄附金
鹿児島県加世田市の楠元慶明氏より、左記のようなお便りを添えて十万円のご寄附をいただいた、「昭和八年千葉医大卒の父、楠元己千之は昭和五十二年十一月二十三日、脳血管循環障害にて七十才にて死去致しました。……妻、楠元美津と子供達とで相談の結果、生前父がお世話になりました千葉大学医学部のはな窓会へ、香典の一部十万円を寄附させていただきます。わずかばかりの金額でお聴しい次第ですが、会の運営の一助にでもお使い頂ければ幸甚に存する次第です。……」
常任理事会としては有難くご芳志をお受けし、ご好意に酬いよう有意義に使用することとした。紙面をかりて有難く御礼申し上げる次第である。

故千葉大学あのはな同窓会名誉会長 花岡和夫先生を悼む

千葉大学あのはな同窓会長
大塚文郎

あのはな同窓会の重鎮でもあり象徴でもあられた名誉会長花岡先生がお亡くなりになって、ほんとうに巨星地に落ちた驚きと寂しさを禁ずることが出来ません。先生は、或は初代のあのはな同窓会長として、或は名誉会長としての発展には心を砕かれ、力を尽されて来られ、その御功績は私共は忘れるようとしても忘れることが出来ません。

あまのまばらな紅毛の口ひげ、いつくしみに満ちた眼なごし、あから顔のいかにも村夫子然とした童顔どれもこれも私達を引きつけずにはおかなかったのです。学識経験の豊かなのに加えて、その識見の非凡さと幅広い行政的活躍はただに同窓会に限らず、社会の各分野に大きく寄与されて、一



長日年福 会31行冥す 名3たで御ま 会生しんし 同先いっし 和夫さつり 花岡眠す 88才。祈を

われ等の花岡和夫先達

前同窓会長 鈴木五郎

半世紀にも及ぼうとする長い間公私共に接触の密だった「花岡さん」のこと故に思出は数限りなく、それによつて先生の為人が顕然としてくるのであるが茲には同窓会との関わりについてのみ故人を偲ぶ「人は当に往事を忘れざるべし是を厚德をなす」という。今日立派な組織をもつ我医学部あのはな同窓会は妙なことに乍ら其成立にはまことに難渋を極めた。この

層その人となりの真価を高められました。殊に誇らず、矯らず、銜わずの謙虚さは私共の心の奥底に深く無言の訓えとして刻まれて、生涯渡世の灯となつて消えることがないであります。

この偉大な先生も今はなく、痛恨愛惜の情に堪えません。私共はこれからも先生の遺された大きな足跡を汚すことなく一生懸命努めまして、よりよい会としたいと希念しています。

先生、どうか安らかに眠り下さい。

~~~~~

家児玉勝利君が一外の医局員であり教室第四研究室は同窓会結成準備室ともいう状態、よく同志がこの四研に集つては鳩首凝議しているのを見、ときに会則試案なども見せられ多少のアドバイスもしたりしたので会の誕生に無関心でなかった。この頃井上病院々長花岡和夫との連携緊密なる様を見て頼もしく思つたものである。そうして花岡さんは会長で谷川君が理事長として一切の責任を背負つて立つた頃を知る。児玉君の活動はものすごく筆紙にふくし難きものがあり、一年間は好きな研究も放擲してやるといつて文字通り東奔西走した姿も忘れない。当時の熱っぽい状況を思うにつけても健康な思想の持主であり円熟した大人の風格をもつて後進を迎えた花岡さんの態度は終始変る事がなかった。

国の困窮極端なときに早くも決断して同窓会館の設立を企画し松

本君等の奔走で資金を調達し会長呢懇の業者の奉仕的工事であるの会館が出来たととき。爾来同窓の利用頻りなるものあり老朽の今日に及んでゐる。そこには佐藤物外外の書質交行の掛軸がかかれ同袍団樂のシンボルの観があり、又あのはな同窓会館なる加賀谷勇之助筆立派な扁額も花岡会長の発意だつたように記憶する。松本祥名書教授の父君東籬園主人高三郎先生の書も見え。何れも大切に語り伝えらるべきものと思う。所謂四金会なるものも花岡さんや谷川君等の発想で此日は任意会員が集り誰彼と清談に放談に一時を過ぎ得るようにとの願をこめて生れたのである。そうしてこれには市川重平先輩等もよく出席し、又大学の長老松村、赤松等諸先生もよく見えてわれ等は温い雰囲気の中に何かと啓発されるものがあつた。記念講堂建設の発議は全く別であるが之が実現には同窓長老の立場で格別の配慮を惜しまなかつたことを知る。

大戦から既に三十数年を経たがあはな同窓の環境下に於ける活動には真価を発揮したと思う。そうして常に新しい医学技術を野に活用すべきを説き、大学の研究成果に期待をおき最後迄後輩の在り様に大いなる関心をもち、国を憂い我医療の実践に心をくだき、衰いを知らず生涯を斯道に打込んだ稀に見る国手というべきものと思う。その純粋なる姿勢に敬意を表し謹んで御冥福を祈る。

(一九七八・五・八)

## 故花岡和夫先生を偲んで

井上病院長 杉山三郎

故花岡和夫先生が、井上病院を継承されてから四十八年になります。私が当院に参りました(昭和十一年)当時先生は、県医師会会長としておられました。病院内の診療、市内外の往診多く、夜は遅くまで勉強され、活躍しておられました。

病院は順調に発展を続けられましたが、二十年六月空襲の際御奥様を喪はれ、七月の空襲により、病院全部を焼失されました。先生の御心中をお察し致します時、痛恨の情に堪えませんでした。挫折感も感じられず医療同病院を開設されました。同団解散が決まりましたと諸事困難な状況の中、二十二年病院を再建されました。

次々に病棟を増築され、十年前に現在の本館が増築されました。これは先生の高い理想、ご人徳、熱情の賜と敬服いたしております。



## 花岡先生に

感謝する会の  
思ひ出

先生が心血を注いで創立と運営にあたつてこられた結核予防会千葉県支部長と、千葉県対がん協会長の職を勇退されたのを機に、長年のご功績とご尽力に報いたいとの趣旨の集いが昭和五十二年十一月十六日にニューナラヤ大食堂で催された。「酒がうまいなア」と申されたことも今や思い出の一つとなつた。

# 生物活性研究所の新営・移転

## 新井正教授(前所長・昭21卒)の言葉

昭和五十二年秋、活性研が連絡道路南側の地に新営・移転したが、その当時の研究所長であった新井教授が挨拶をよせられた。その後所長の任期を満了されたが、本稿はいのちのな台へ移転時の所長としてお書き下さったものである。

活性研の新営・移転にあたって、昭和52年、秋の十月半ば、生物活性研究所は、いのちのな台に移転してまいりました。昭和21年9月、千葉医科大学の附属施設として発足以来、「腐研」の名で皆様から親しまれておりましたが、昭和48年9月に改組し、現在の名称に改め、今では「活性研」という略称で通っております。

この研究所を、いのちのなキャンパス内に新営することは、長年の念願でありましたが、諸般の事情から、実現には多くの時間がかかりました。香月学長、相模前学長を頂点とする本学主脳部の方々の御努力、横川医学部長(編集部注・移転時)はじめ医学部諸先生の御理解と御支援により、ようやくその夢がかなえられたことに、深く感謝しております。

新研究所は、延面積三千四百九十五平方メートル、白亜の六階近代建築であります(写真)。千葉大学における唯一の附置研究所で「生物活性の学理とその応用」を目的に、医学系四教授、薬学系三

教授による研究部門で構成され、研究内容は多岐に亘っておりますが、医学・生物学の境界領域に関するテーマが主であります。また新しい抗生物質を試験的に製造する施設や、化学構造の決定に不可欠な核磁気共鳴装置、ガスクロマトグラフィー、マススペクトロメーター、あるいは最新の透過型および走査型電子顕微鏡など、先端をゆく大型機器を擁し、その他中・小の各種測定器を含めて、研究

体制は質的に充実しております。また、これら機器類の学内利用体制も、機器センターの設置により整いつつあります。

この度念願かなって医療百年の伝統を誇るいのちのな台の一員に加えられましたが、今後とも、研究所の総力をあげて斯界の発展にむけて努力する意欲に燃えております。皆様の御指導、御支援をお願い申し上げます。

新井 正

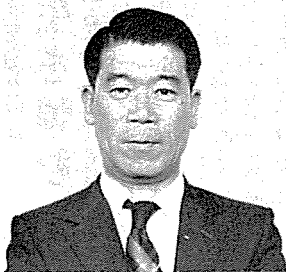
## 久我哲郎教授(昭26卒)

### 生物活性研究所長に就任

この度生物活性研究所長に就任された久我教授はその抱負を次のように述べられた。氏は昭和二十六年に医学部を卒業、薬理学教室にて研究、講師を経て昭和四十五年に生物活性研究所の教授に昇任転出した。

新井正前所長のあとをうけて四月一日付で生物活性研究所長に就任いたしました。

いまや一大学園地となったいのちのな台における活性研の役割を考えると、所長としての責務の重大さに身の引き緊る想いがいたします。幸いにもこのいのちのな台は私のいわば古巣、良き先輩、



## 成田赤十字病院だより

院長 渡邊 進(昭5卒)

私どもの成田赤十字病院は、今年で丁度、創立三十周年を迎えます。

当地のお不動さまの、まん前で当時蓬萊閣と言ったホテルが、霞ヶ浦海軍病院に接収され、戦後は日本医療団成田病院となっていたのが昭和二十三年一月末に解散と



同僚、そして後輩の諸先生に囲まれています。これら諸先生の御好意に甘えるばかりでなく、節度ある協調の下に研究所の運営に当る所存であります。

また研究所は、今まで習志野にあって、閉された面が多かったと自覚しております。これを積極的に関いて、諸先生の御教示御批判を頂きたく存じますので宜しくお願い申し上げます。久我哲郎

い公津の地に移り、再度の増築を経て今日の姿となりました。

ベツト四二二(印旛伝染病院併設四六床を含む)職員三七〇(医師常勤三六)です。

急性伝染病を除く、ベツトの利用率は常に九五%以上。新国際空港開設をめぐる諸問題も漸く厳しさを増し、当地方唯一の公的総合病院であるため、何でも頼むべくと持込まれる状況で、病院は将にパンクに類していると申しても過言ではありません。

ドクターを中心とする職員、いわゆる「さむらい心」にのみ依存する時期は既に過ぎたるやとも考えられると申せましょう。

人口の急増に伴って、県として力をいれている救急の問題も極限にきているようです。一次から三次まで事実受けざるを得ない現状で、一同頑張っています。

医療器械の整備もなかなか、赤十字病院の特性上むづかしいもの、一つであります。地域医療に徹するの道は、これに懸っているとも申せませんので努力して居ります。CTスキャナーを昨年冬から整備しましたが、取り扱にも慣れて昨今威力を発揮しはじめました。

それに、も一つ特筆致し度いのは、病院創設時以来の念願が、漸く各方面のご協力を得て実現したことで、この四月に、成田赤十字看護専門学校を併設開校することが出来ました。一応一学年三十名の定員で、ひろく千葉県下全般から三倍の応募があり、優秀な学生たちを集められましたし、香月先

## 柏戸病院開院

### 50周年記念会開催

柏戸病院(千葉市長洲2-21-1・柏戸正英院長・昭33卒)では3月11日開院50周年記念と新病院落成披露式を病院で開催した。同病院は初代院長柏戸留吉氏(元第二内科教授)が昭和3年、現在地に「柏戸内科病院」を開院したのが始まりで、また本年は初代院長生誕100年になるそうである。半世紀にわたり地域医療の向上に大きな役割を果たしてきた。二代目院長は故孝雄氏(東京大学昭和7年卒)で現院長は三代目にあたる。

新病院は昭和43年に第一期工事完成、引続き第二期工事が進められていたもので、六階建、内・外科をはじめ、人間ドックまである医療施設で、病床数194床をもつ。

遅刊をおわび致します